

## 「違った」考

### A Note on *Tigatta*

山西 正子  
Masako YAMANISHI

#### Abstract

In modern Japanese, the verb *chigau* has the same meaning as its *-teiru* form *chigatteiru*, as in “Kono kotae wa *chigau/chigatteiru*.” An investigation revealed that there has been an obvious tendency to distinguish between their past tense forms *chigatta/chigatteita* since the Meiji era. Specifically, *chigatta* has mainly been used as a modifier, whereas *chigatteita* has had the predicative function. The reason for this distinction in use, however, remains unknown. In most cases, *Chigatta* can be used interchangeably with “*betsu no*,” as the equivalent of the English word “another” as a modifier, and has hardly been used as a verb; for a predicate verb *chigatteita* has been used. However, in recent years, the use of *chigatta* as a predicate verb is often observed. For example, sentences with ending like “Shashin towa *chigatta*” appear in newspapers. In recent years, adherence to the unexplainable distinction since the Meiji era between *chigatta* and *chigatteita* in their actual use seems to have decreased. As one of the issues about modern Japanese usage, adjectivalization of *chigau* is pointed out. That is, its deformation such as *chigakatta* and *chigakunaru* is often discussed. *Chigatta* as a predicate should also be investigated.

*Keywords* : *tigau*, *tigatta*, modifier, predicative function

キーワード : 「違う」、「違った」、連体修飾、述語

#### 【内容】

- 0 問題提起
- 1 近代語の状況
- 2 考察
- 3 まとめ

## 0 問題提起

### 0-1 本稿の目的

本稿は、文字列「違った」「ちがった」を対象とし、用例調査に基づいて、近代語における、その用法上の一傾向を指摘する。

結論として、過去においては、「違った」（以下かながき「ちがった」を含むことがある）と、「違っていた」（以下「違ってゐた」やかながき「ちがっていた」などを含むことがある）の間で、すくなくとも「書き記される」レベルでは、相応の使い分けがなされる傾向があったことを推定する。

すなわち文字列「違った」は、かつて、述語としてよりも、修飾語として使用された例のほうが多かったことを指摘する。

また、「違う」の場合、現在形の文末用法「違う。」と「違ってゐる。」は意味、用法ともに差異はないようにうけとられる。この事実が、一時は、相応の使い分け傾向が存在したと考えられる「違った」と「違っていた」に及び、昨今の文末の「違った。」の頻出に至ったとする考えも示したい。

### 0-2 問題点——違和感をもたらすもの

稿者は、「朝日新聞」の、文末の「違った。」に対して、違和感をもっている。

- (1) 一行は日本の酪農の将来を背負っていた。しかし、ひとり北村は違った。

（「プロメテウスの罫」アメリカに派遣された団体 2012. 3. 20 朝刊3面）

- (2) 「球速も、球のキレも地方大会とはまったく違った。今のままじゃ甲子園では対応できない」（春の全国選抜高校野球大会 横浜高校の選手による、敗戦の弁：相手校智

弁学園の投手を評価 2012. 3. 20 朝刊29面）

- (3) 前日の予選後、初タイトルについて聞かれた時は「全然考えていない」と言った。でも、実際に手にしたら違った。「うれしい気持ちでいっぱいです」。

（女子体操・田中理恵、日本選手権初制覇 2012. 4. 9 夕刊10面）

- (4) 滑車を使って落下スピードを調節しながら着地する段取りのはずだった。だが本番は違った。窓から身を乗り出し手すりから手を離れた瞬間、・・・略・・・

（元テレビ局アナウンサー菊間千乃 事故を語る 2012. 4. 28 朝刊b9面）

この、文末の「違った」は、ひとり「朝日新聞」のみならず、他紙にもある。現時点では、もはや「異とする」に値しないというべきか。

- (5) （高齢者介護施設で、対応困難な利用者の女性について）「また“奇声”で周囲を困らせるぞ」と私が思っていると、ここの職員は違った。

（かいごサポーターがゆく 2012. 5. 20 「神奈川新聞」朝刊17面）

稿者の感覚では、上記の状況においての文末は「違っていた。」である。実際に文末の「違っていた。」は「朝日新聞」に存在し、これに違和感はない。

(6) 31日にいったん終了した「地球イチバン」(NHK)は、従来の、世界を紹介する番組とは違っていた。毎週欠かさず見ていた。

(はがき評＝視聴者による番組評 2012. 4. 10 朝刊26面)

最近、日刊紙において、(1)～(5)のような文末の「違った。」をしばしば見る。執筆時点での例を念のため記す。

(確認例) 当日の朝、抜くことを決めた。その理由について「直感」と言った。本当は違った。 (ロンドン五輪・内村航平、優勝にこだわり、熟慮の末、G難度の演技を回避 2012. 8. 2 「朝日新聞」夕刊1面)

稿者の違和感はまったくの「個人的感覚」なのか、あるいは、多少なりとも客観性のあるものなのか、であるとすれば、いかなる事由があるのか、考察していく。

ここで、問題としているのは、「書き記された語」としての「違った。」である。

稿者も口頭語としては、言い間違いや勘違いに気づいたときなど、「違った!」や挿入形の「あ、違った、そうではなくて」を使用する(用例(14)(15)参照)。しかし書き記された「違った。」という文末には違和感がある。

口頭語としてはみずから多くの場面で「違ってます」としながら、書き記された「違ってます」には違和感があり、「違っています」と添削してしまうことがあるが、これと似た現象である。

口頭語と、書き手の(程度の差はあるにせよ)、ある種の内省を経た「書き記された語」とには、時に差異があるという前提で考察していく。

### 0-3 前提——「違う」の性格

そもそも、「違う」については、すでに言及がある。

金田一春彦(1947)は以下のように述べる。

第一の状態動詞と第四種の動詞(稿者注:金田一によれば「いつも「ている」をつけて用いられるゆえ、終止形の用法はないといってもよい)とを兼ねているものもある。「違う」は、下足番に対して、「この下駄は違う」とも言えるし、「この下駄は違っている」とも言える。唯、「違う」とだけいう時は状態動詞であり、「違っている」という時は第四種の動詞である。

「違う」と「違っている」は、ともに文末用法をもち、しかも、同意であると考えられる。ここで例示された「下足番」や「下駄」という設定は、1947年はともかく、21世紀には通用しにくいであろうが、設定を変えれば、理解できる。たとえば、数学の授業で教師が生徒に対して(以下、作例については(△数字)とする)、口頭で

(△7 a) 「この答は違う。」

(△7 b) 「この答は違っている。」

はともにあり得る。

これは、日常生活からはいささか距離のある場面の、文章語としても通用する現象であって、

(△8 a) A国とB国の政治体制は根本的に違う。

(△8 b) A国とB国の政治体制は根本的に違っている。

は同じ意味であろう。

ところが、稿者の言語感覚は、これらを過去のかたちにした「違った」「違っていた」については、「同じ」と受け止められない。その理由を説明する手段はあるのだろうか。

1 以下はそのための考察である。

なお、『日本語文法大辞典』（2001 明治書院）においても「ちがう・ちがえる」は立項され、斎藤文俊の詳細な記述があるが、本稿の関心と重複する説明はない。

#### 0-4 関連事項——終止形と「テイル」形

周知のごとく、動詞終止形と「テイル」形は、一部分で重複することもあるが、基本的には異なる。

終止形は、教科書などで、一般的属性を記述するときは「テイル」形と交替可能だが、一般的には、未来の行動を示す（蛇足ながら、「いま、食べる。」と「いま、食べている。」は同意ではないのである）。

一般的属性を記述する例として、たとえば、生物学あるいは社会学のテキストであれば、

(△9) ペンギンは寒地に住む／住んでいる。

(△10) ゾウは群れで暮らす／暮らしている。

(△11) 最近の学生は主として電子辞書を使う／使っている。

のような、記述が考えられ、文末の終止形は「テイル」形と差異はない。

このうち、「違う」と同様の、一定時間を要する動詞の(△9)「住む」については、小池清治(2001)が連体形の「栃木県に住む外国人」と「栃木県に住んでいる外国人」を例に説明している(以下、稿者の要約)。「住む外国人」は、「これから住む予定のある外国人」のほか、「いま、現に住んでいる外国人」をも意味する。具体的にいえば、副詞「現在」と共起できるのである。

すなわち、現在の事象については、連体修飾の「住む」は「住んでいる」を含意できることになる。

これが、いわゆる「瞬間動詞」の場合、例えば「消える」であれば、連体修飾の

(△12 a) いま、消えるランプ

(△12 b) いま、消えているランプ

は同意ではない。「消える」はそれ寸前の、「消えている」は完了状態の表現であり、重なると

ころはない。

むろん、たとえば街灯を想定し、その一般的属性を示す場合

(△13 a) いつも朝6時に消えるランプ

(△13 b) いつも朝6時に消えているランプ

は、重なると解釈できる。

煩雑になるが、体言修飾の連体形の場合、動詞の性格により、動詞連体形と「テイル」形の重なり方に差異があることを再確認しておきたい。

「住む／暮らす」は、「現在、住んでいる／暮らしている」を含意することもあるが、「消える／落ちる」は「現在、消えている／落ちている」を含意しない。

「違う」の場合は、金田一のいうように、終止形の「違う。」と「違っている。」は同意でありながら、むしろ、体言修飾の連体形においては、「違う答」「違っている答」のほか「違った答」が存在し、その異同が問題になるのではないか。そして拍数の点で、この3パターンでは「違っている」が、「長すぎる」ため、時には回避されることが想定できる。

同じ、いわゆる「第四種」の属する「似る」であれば、述語「似る。」は存在せず、「似ている。」のみである。ここで、「違う」と「似る」とは違う。また、連体修飾では、「似る答」はなく、「似た答」が多い。「似ている答え」は存在するが「似た答」が優勢ではないか（口頭語であれば「似てる答え」もある）。ここでも、「違う」と「似る」とは違っている。

## 1 近代語の状況

### 1-0 調査の実施

ここで、「書き記された語」の典型として、CD-ROM版新潮文庫の100冊の「違った」「ちがった」を検索する。

明治から昭和までの長期間にわたる、翻訳を含む文学主体の作品の用例を一括することは、あまりに粗雑な、精度を欠いた方法である。ただし、稿者の文字感覚はこれらの文学作品によることが多い。その際、発表年代などに配慮することは多いとはいえ、稿者の違和感を起点にする調査であれば、「傾向を把握するための手段」として、ひとまず許容されると考える。

しかし、それでもなおかつ、何らかの「傾向」が見いだせるならば、次の精査につながるものになるだろう。

この立場から、あえて、問題点提起を目的に実施することとした。

まず、「違った」「ちがった」の調査結果を示す。「違った」「ちがった」を後項要素とする複合動詞「すれ違った」「まちがった」などは除外してある。

調査範囲には、「違った」176例、「ちがった」51例、計227例がある。

特筆すべきは、述語の「違った」「ちがった」が、稿者の違和感を裏付けるかのように、多くはない点である。

純粋な終止形の「違った。」「ちがった。」のほか、疑問の終止「違ったの」、感嘆の終止「違

ったか」、接続の「違ったので」など、文・節の中で述語となっているものを総称して「述語」とし、整理した。

### 1-1 「違った」の実態

0-1で述べた、稿者も発している口頭語としての述語「違った」は書き記されていた。

(14) 「違った！芸者の方で、私が敵さ」 (歌行燈)

稿者注：会話相手の推測が「外れた」ことを指摘するシーン

(15) 「はい警察です。あ、違った。社長室です。(以下略)」 (女社長に乾杯)

稿者注：言い間違いを訂正するシーン

しかし、それ以外の状況の、いわゆる地の文の述語「違った」はたしかにある。

(16) この下屋敷へ来てからは声の調子が違った。 (破戒)

(17) 同じ赤い顔でも、その場合場合によって表情は違った。 (孤高の人)

(18) 年とった乳母たちは、考えることが違った。 (新源氏物語)

このように、述語の「違った。」はあるのだが、その中で指摘したいのは、精神状態の異常をいう例が、翻訳が主ながら、多いという事実である。

(19) 「〈略〉気が違ったな」と感じました。 (痴人の愛)

(20) 「気がちがったからでさあ」 (翻訳 ハムレット)

(21) 「気でもちがったんじゃないか」 (翻訳 月と六ペンス)

(22) 気でも違ったのかと思った。 (翻訳 赤と黒)

そして、「違った」「ちがった」計全262例中、226例(86.23%)の「違った」「ちがった」は、連体修飾用法であった。

(23) 五回も違った場所を掘っても〈略〉 (解説 砂の女)

(24) 何もかも口と心と違った行動をとらねばならぬ苦しさ、〈略〉 (浜菊・伊藤左千夫)

(25) タケナカとは全く違った蛇のような狡猾さ〈略〉 (沈黙)

(26) 前の光とはちがった方向でひらめいた。 (戦艦大和)

(27) ようすのちがったそよごの木〈略〉 (翻訳 狭き門)

### 1-2 「違っていた」の存在

述語の「違っていた」は確認しやすい。88例を数える。述語の「違った」が262マイナス226、すなわち36例であることと考え合わせれば、「述語は「違っていた」とする稿者の文字列感覚は、あながち「見当はずれ／思い込み」でもなからう。

なお、「違っていました」などを加算すれば、さらに数値は大きくなる。なおここでは例示しないが連体修飾の「違っていた」も若干ある。

- (28) 大宮とは〈略〉世界がちがっていた。(友情)
- (29) 兄は歳が違っていた。(楡家の人々)
- (30) この「新ローマ」は完全に違っていた。(コンスタンティノーブルの陥落)
- (31) イメージとは全く違っていた。(若き数学者のアメリカ)
- (32) 見較べてみたら違っていた。(新橋烏森口青春篇)
- (33) 医者としての感性というのとは少し違っていた。(花埋み)

### 1-3 雑誌「太陽」の用例

1-1、1-2は明治29年の「たけくらべ」から昭和57年の「女社長に乾杯」まで、約90年間の用例による、精度を欠いた観察である。それでもなお、「違った」について、明かな傾向が指摘できた。

ここで、雑誌『太陽』のうち、1895（明治27）年から1925年（大正14）、すなわち、昭和直前までの30年間の用例を整理しておく。検索は「ひまわりコーパス」による。

『太陽』は、総合雑誌であり、翻訳をふくむ文学、自然科学、政治、社会時評、など多方面にわたる。言語資料としての等質性は保証されないが、この時代の日本語であることは、疑いない。

ここでの64例の「違った」についても、連体修飾の例が多いことが確認できた。

#### 1-3-1

まず、連体修飾以外の「違った」9例の一部を示す。さらにいえば、「違った。」という完全・単純な終止の文字列は発見できなかった。

- (34) 「何所とも無くころもちが違ったっけ。」(小栗風葉「一腹一生」)
- (35) 「厭だよお前さんが違ったね」(川上眉山「左巻」)
- (36) 此所が違った、彼所が相違して居る、中々に難しかったものだが〈略〉  
(五月幟の話)
- (37) 「本当に家のは気が違ったのでせうか」(江見水蔭「無能病」)

#### 1-3-2

連体修飾の「違った」は55例あり、しばしば確認できる。別に「違うた」も1例ある。

- (38) 自分の境涯と違った昔の境涯であるから〈略〉  
(坪井九馬三「史学と類似学科との区別」)
- (39) 今回は以前と稍違った細い道を行くと〈略〉(田山花袋「老僧」)
- (40) 「多少平生の布施鋭爾とは違った点があるかも知れん」(佐野天声「銅山王」)
- (41) 日本人には西洋人とは郷土的に違った美しさを持つてゐることをつくづく感じるの  
ある。(朝倉文夫「現代女性美の一側面」)

そして、稿者の認識にはない、「違ったものだ(哉)」という慣用表現らしきものがあった。若干の揶揄を感じることもあるが、他者に対する「褒める」表現である。

(42) 泰平の世の軍人は違ったもの哉 (稿者注：句読点なし 「小是非」)

(43) 交戦国国民の時局に対する心掛は流石に違ったものだ〈略〉  
(某将軍「欧州戦争を中心として」)

(44) 流石は昔取った杵柄だ憲法付属法典の創案者は違ったものだ、と楽屋雀は囁りける。  
(前座陳人「政界太平記」)

(45) 「フム、いゝお心掛ですよ。今時の女の子は全く違ったもんだ。〈略〉」  
(三宅やす子「針の片」)

この「他と異なってしまう」の意味については、『日本国語大辞典』(二版2002)が動詞「ちがう」の中で取り上げているが、「違ったものだ」は慣用表現レベルではなかったかと思われる。『日本国語大辞典』の用例も4例中3例が「ちがふた物」「違ったもんだの」「違ったものだネ」である。

### 1-3-3

述語であれば、「違っていた」が使用される。「違つてゐ(居)た」10例のほか、「違つて居ました」1例がある。

(46) 其以前の日本の社会は余程支那とは性質が違つて居たに相違ない〈略〉  
(田口卯吉「歴史は科学に非ず」)

(47) 奉行所と運上所との役人の服装も、まるっきり違つて居た。  
(豹子頭「明治初年外交物語」)

(48) おしんは〈略〉障子のそばへ目を持っていった。がしかし、これも違つてゐた。  
(稿者注：おしんは気になる学生を探している 藤沢清造「帳場の一時」)

## 2 考察

前述のごとく、述語としての「違った」は、過去において存在しなかったわけではない。しかるに、相対的に、連体修飾の「違った」が相当の比重を占めていたために、稿者の意識の中に「違った。」という文字列が「定位置」を確保していなかったものと考えられる。

最近、日刊紙の「違った。」に接したことが、稿者の違和感を引き起こしたのであるが、理由が考えられないわけではない。すなわち、「新聞」という場における、字数制限への配慮である。記者にはつねに、字数の制約があろう。

動詞「違ふ」に限っていうなら、

①まず一般論として比例式の

「終止形」：「ている形」 = 「～た」：「～ていた」

が成立し、



②かつ「違う」の場合は、金田一（1947）の指摘どおり、等式

「違う」＝「違っている」

が成立する。さすれば、「違っていた」から「違った」へのシフトは、「説明しにくい慣習」から、新聞における字数節約の「合理主義」への変化として、ひとまず、説明がつく。

### 3 まとめ

現代語においては、動詞「違う」が形容詞化し、「これはちがくない」「それはちがかった」などの語形が、時に出現する。今後、この変化が「逸脱」として修正されるか、あるいは動詞「好く／嫌う」が「好きだ／嫌いだ」を共存させているのと同様の方向をとるのか、予測はできない。

「違う」は、それなりに問題を含む存在である。

その中で、過去において連体修飾主体であった「違った」が、近年に至り、述語用法、ことに文末の「違った。」をも顕現していることは、ささやかな事実ながら、書きとどめておくべきであると考ええる。

本稿は、稿者の違和感のみをよりどころとし、わずかな用例調査に基づき、一面的な推論をしたにすぎない。

不備な点が多い。たとえば、述語の「違った」と「違っていた」はまったくの同意なのか、あるいは連体修飾の場合の「違う意見」と「違った意見」に差異はあるのか、など説明できていない。

不備のそれはそれとして、「違った」が、観察の必要な存在であることは、指摘できたものと考ええる。

#### 【参考文献】

金田一春彦（1947）『国語動詞の一分類』『日本語動詞のアスペクト』1976 むぎ書房  
小池清治（2001）『現代日本語探究法』朝倉書店

（平成24年11月9日受理）